

## 忘れ語り、いま語り

## 会津と台湾の絆のために

福島県立博物館の小さな特別展として、『西川満展』を開催したことがあった。その図録に掲載する文章として書いたものである。記憶があやふやで、実際に図録が台湾側で制作されたのがいつであったか、確認できずにいる。

☆

ささやかな規模ではあるが、この夏、福島県立博物館において西川満の事績を偲ぶ特別展が開催されることになった。それをきっかけとして、会津と台湾とを文化や芸術によって結ぶ交流プロジェクトが、さまざまに展開されてゆくことだろう。正直に書いておけば、すべては手探りに試行錯誤を重ねながら、ゆるやかに動いてゆくはずだ。わたしたちはいまだ、ほとんど海を越えての交流についての経験を持たず、挫折や失敗をくりかえしつつ、半歩でも一歩でも前に向かって進んでゆくことしかできないからだ。わたしは東日本大震災のあとに、状況がどれほど厳しく悲惨であったとしても、諦めてはいけない、諦めたときにすべてが終わるのだということを学んだ。

なにしろ、わたし自身を含めて、わたしたちはだれ一人として、西川満という人物について、いや、その名前すら知らなかったのだ。むろん、不明を恥じはするが、その名前を知る日本人はきわめて少数派であることを、いまでは明らかに知っている。西川満の著書として戦後に刊行されたなかで、もっとも多くの読者の目に触れたのは、おそらく『ちよぷらん島漂流記』の中公文庫版（一九八六年）ではなかったか。すでに絶版・品切れである。わたしはそれを、古書店のネット検索で見つけて手に入れた。新刊書として買い求めることが可能な著書は、一冊もない。

残念ながら、西川満という作家ないし文人はどうに忘れられた存在なのである。忘れられた、いわば過去に属する存在であることをひとたび認めたらうえで、わたしたちはあらためて、「その人」を再発見しながら、新たな関係を結びなおさなければならない。そこが、すでに決定的に台湾の人々とは立場が異なり、少なからず隔たりがある。そうして、西川満をめぐる海を越えての交流には、あらかじめ固有の困難が埋めこまれているのである。わたしたちはいま、ようやく、西川満とはだれか、という問いに真っすぐに向かい合うことを始めている。

西川は福島県会津若松市の出身であり、三歳のときに父親とともに台湾に渡った。初代若松市長・秋山清八の孫にあたる。台北一中を経て、早稲田大学仏文科を卒業してから、台湾日々新報に就職している。多くの雑誌や本の編集・制作にかかわり、台湾の文芸振興のために力を尽くした。敗戦とともに帰国したが、ついに会津へ戻ることはなかった。台湾時代の奔放さや華やかさからは遠い、いくらか不遇な後半生であったかもしれない。

今年は、戊辰戦争から百五十年に当たり、その年に西川満が生まれ故郷に小さな「凱旋」を果たすことは、ほんの偶然ではあるが、わたしにとっては無視しがたい偶然の符合である。戊辰戦争は一八六八年から翌年にかけて、日本国内を二分した内戦であった。東北諸藩は奥羽越列藩同盟を結んで、薩摩藩と長州藩を中心とする西軍と戦い、敗北へと追い込まれた。奥羽越列藩同盟の中核をになったのが会津藩であり、鶴ヶ城に立て籠もって抵抗の戦いを行なったが、三〇〇〇人の死者を出して敗北した。その後、会津藩士たちは家族とともに、本州最果ての下北半島へと「シベリア流刑」（司馬遼太郎）のように追放され、辛酸を舐めさせられた。実は、西川の祖父はまさしく会津藩士として、戊辰戦争に参戦し、籠城戦と下北移住を体験している。

会津は近代を、「賊軍」の汚名を負わされながら生きることになった。いわば、敗者の精神史を背負って、とりわけ士族の末裔たちは生きること強いられたのである。東京という帝都において、立身出世を果たす道は狭く閉ざされていた。西川が父親といっしょに、台湾に渡った背景には、そうした敗者の精神史が影を落としていると、わたしは想像している。

わたしはこれまで、戊辰戦争の敗者となった東北の士族の末裔たちのその後に興味をいだき、追いかけてきた。かれらの一部は、自由民権運動の大きな流れのなかに身を投じて、たとえば「五日市憲法」として知られる民衆の起草になる憲法草案の生みの親となっている。あるいは、奄美・沖縄地方に渡って、教育や文化、また政治の分野において活躍した人々がたくさんいる。印象的なのは、かれらがみな、そこで触れ合った島の人々から尊敬され、いまにその名前が語り継がれていることだ。かれらは島の若者たちを集めて、教育を施し、島の文化・民俗・歴史などを掘り起こし、記録として残すために力を尽くした。政治的には、島人の側に立って、国家や地方権力による圧政にたいして抵抗の戦いを演じた者もいた。

かれらは例外なしに、奥羽越列藩同盟に連なり敗者となった士族の末裔であった。それゆえに、敗者の痛みを知っていたのだ。だからこそ、植民地的な状況におかれて、苛酷な政治に翻弄される島人たちに寄り添う道を選ばずにはいられなかったのではないか。わたしはそんな想像を巡らしてきた。

奄美や沖縄を訪ねて、かれらの足跡を辿るフィールドワークも行なってきた。衝撃を受けたのは、島の人たちがその名前をいまでも語り継いでいるのにたいして、日本本土の、かれらの故郷の地ではたいてい名前すら知られず、忘却された存在であったことだ。仙台のあるお墓をようやく尋ね当てたとき、墓石が崩れかけていることに涙がこぼれた。あわてて供える花と酒を買いに走らねばならなかった。わたしは沖縄本島の、さらに南の島のたいせつに守られている銅像を思いながら、島の人々の思いも籠めて手を合わせたのである。

わたしにとって、台湾は奄美・沖縄の延長上にあった。西川満が台湾の人々から愛され、尊敬されている姿に出会ったとき、かれが会津出身の士族の末裔であることを確認したとき、そこにも敗者の精神史を背負い、敗者の痛みを知るがゆえに、きちんと人間らしく振る舞うことができた東北人がいたのだ、とひそかに思った。

わたしはこの数年、岩手県遠野市で遠野文化研究センターの所長を務めている関係で、その遠野出身の台湾学者である伊能嘉矩に導かれるように、台湾との繋がりが生まれていた。この人が残した『台湾文化誌』という、分厚い台湾研究の書は中国語に訳され、いまでも大事に読み継がれているし、伊能が台湾の人々から尊敬されていることを、わたしは知っている。さすがに、遠野では伊能の名前は忘れられてはいないが、『台湾文化誌』は古書店でも高値がついており、手に入りにくいし、それを研究する者となると、残念ながらお目にかかったことがない。

念のために言い添えておけば、伊能嘉矩もまた、奥羽越列藩同盟に連なり敗者となった士族の末裔であった。伊能は台湾に渡ったとき、みずからが古代東北の蝦夷と呼ばれた先住異族の末裔であることを意識していたらしい。蝦夷は国家をつくらず部族社会を生きていたが、古代の九世紀のはじめに、ヤマト王権によって差し向けられた軍勢との戦いに敗れて、その後、千年の植民地としての歴史を背負わされて生きてきたのである。伊能のなかには確実に、そうした蝦夷の血筋にかかわるひそかな矜持と覚悟があったのだ、と思う。だから、台湾に渡って、たとえ「調査」という形であれ、原住民の人々と対面したときに、同情とか共感がなかったとは思えない。蝦夷の末裔という自覚に立って、伊能は「蕃族」の人々の歴史や文化・民俗を記録として残すことを使命と感じていたのではなかったか。

わたしは残念ながら、西川満という人について、伊能ほどには確信をもって語ることはできない。しかし、西川その人の、会津若松出身であり、奥羽越列藩同盟の敗者となり「賊軍」と貶められた士族の末裔であること、父とともに台湾に渡ったこと、文化や芸術に可能性を託して、啓蒙的な活動に従ったことなどがみな、偶然とは考えられず、一本の線で繋がっているような気がしている。西川はのちに、祖父の秋山清八の「会津戦争秘記」を復刻している。子どものために書いた『猫寺』という小さな本は、会津の昔話を素材にしたものであるが、その奥付にはわざわざ「福島県士族」という文字が記されてあった。敗者の精神史という視座はおそらく、決定的にたいせつな、欠かすことができない分析の要となるはずだ。

『ちよぷらん島漂流記』の文庫版の「あとがき」には、この本の成立ちについて、「波瀾に満ちた文助の漂流顛末を経とし、蕃人アミ族の宗教、産業、交易、生活、戦闘など、興味ある習俗を緯とし、これにわたくしの夢と空想とを自在奔放に加えて、つくりあげたものである」と説明している。ある漂流民の手記の写本を元に小説化を願ったが、それが刊行されたのは敗戦によって帰国してからのことである。作中では、蕃族や蕃人という言葉を用いたが、「この小説の舞台となった時代感覚」にもよるし、また「蕃」の字はけっして「蛮」とは同意語ではなく、「しげる」の意であり、現地では「山川草木と共にしげる民族の意から用いた」のだ、という。そして、最後にいたって、「本書を、今は遠い、海の彼方となった、愛するわが台湾へ、ここからささげたい、と思う」と書きつけられている。

いま、台湾では文学や芸術がとても大事にされているようだ。福島の震災からの復興もまた、文化や芸術とともにあるべきだと思う。あらたな絆が生まれてほしい。わたし自身の台湾通いも、どうやら始まったようだ。この夏の終わりには、台南を中心にして一週間ほど滞在することになる。若い人たちが何人か参加する。台湾のなかの「東北」を、また東北のなかの「台湾」を探す旅になるにちがいない。